

氏 名	沖本 民生
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第430号
学位授与年月日	平成26年12月22日
審 査 委 員	主査 教授 並河 徹
	副査 教授 木下 芳一
	副査 教授 椎名 浩昭

論文審査の結果の要旨

肺癌の化学療法は現在、小細胞癌とそれ以外の組織型（non-small cell lung cancer: NSCLC と略）に分けて行われているが、近年、NSCLC の中でも種々のバイオマーカーを用いて抗腫瘍薬への感受性を調べ、化学療法をより個別化する試みがされ始めている。しかし、従来は手術摘出標本を用いた検討が主体であったため、手術例にしかこのような検討がされていなかった。申請者はこれを手術できない進行癌症例に拡張するためには、生検材料で得られる情報が患者の癌組織全体を反映したものであることが必要であると考え、抗腫瘍薬の効果に影響することが知られている4つの酵素・蛋白質の発現について、同一患者の手術材料と生検材料の間で相関するか否かを、免疫染色を形態学的に評価することで検討した。32例の肺癌患者から得られた手術材料と生検材料を用いて、Excision repair cross-complementing gene 1, Ribonucleotide diphosphate reductase M1, Thymidylate synthase, Class III beta-tubulin（以下 tubulin と略）の4種類の酵素・蛋白質を免疫染色し、その染色強度を調べた。tubulin を除く3つについては、染色強度（4段階評価）と陽性となった面積（4段階評価）を乗じて算出した H score を用い、tubulin については、染色強度のみを用いて評価を行ったところ、生検材料と手術材料の間で有意な相関がみられた。

このことは、NSCLC における上記4種のマーカー発現については生検材料で癌組織全体での発現状況を推測可能であることを示唆しており、今後化学療法をさらに発展させていく上で貴重な成果である。